

研究テーマ

論理的に思考し表現する力を高める学習指導の在り方

～国語科における ICT を活用した対話的・協働的な活動の場の工夫を通して～

1 主題設定の理由

小学校学習指導要領国語科の目標（以下「目標」という。）には、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成することを目指す。」と示されている。ここで言う資質・能力とは、具体的には各学年の内容に示す指導事項である。つまり、小学校国語科の学習指導は、当該単元で指導する事項を、適切な言語活動を通して指導することが基本であると捉える。

本校における、令和6年度県学力診断のためのテストの結果から、読み取った情報を基に自分が考えたことや想像したことを書いたり、構成や書き表し方に着目して整った文章に表現したりする設問の正答率が低いことが分かった。このことから、児童は、国語で表現された内容や事柄を正確に理解したり、国語を使って内容や事柄を適切に表現したりする力が弱く、言語を手掛かりとしながら論理的に思考する力や豊かに想像する力である「思考力、判断力、表現力等」の育成に課題があると考えた。

そこで本研究では、目標に示されている「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」を育成するために、児童が論理的に思考したり表現したりする力を高めるための国語科学習指導の改善を図ることとした。手立てとして、学習指導要領のねらいを基に、児童の発達や学習の状況に応じた適切な言語活動を位置付け、さらに「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」を相互に関連付けた指導計画の立案が必要である。また、資質・能力の育成を図るには、「主体的・対話的で深い学び」が必要であると考えた。そのために、「対話的・協働的な活動の場」を位置づけた授業改善が重要であると考えた。「対話的な活動の場」では、子供同士の協働や教師との対話、また教材文との対話等を通じ、自己の考えを広げ深める力を高める。また「協働的な活動の場」では、対話を重視し、多様な他者とともに、互いの思いや考えを共有し、より良い結論を見いだしていくための資質・能力を育成していく。また、2021年1月に示された中央教育審議会答申では、「ICTを『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善に生かすとともに、従来は伸ばせなかった資質・能力の育成や、これまでできなかった学習活動の実施に活用する」と示している。これらを受けて、国語科における効果的なICTの活用を通して、「思考力、判断力、表現力等」の育成を図ることができると考えた。

以上のことから、国語科におけるICTを活用した対話的・協働的な活動の場の工夫を通して、論理的に思考し表現する力を高める学習指導の在り方を究明することとし、本主題を設定した。

2 研究のねらい

国語科におけるICTを活用した対話的・協働的な活動の場の工夫を通して、児童が論理的に思考し、根拠を明確にして表現する力を高める学習指導の在り方を追求する。

3 研究の仮説

国語科において、ICTを効果的に活用し、「対話的」「協働的」な活動の場を意図的に位置づけた授業を展開すれば、児童は言語を手掛かりとしながら根拠を基に考えを構成し、論理的に思考する力や的確に表現する力を高めることができるであろう。

4 仮説検証の方法

- (1) 全国学力・学習状況調査及び茨城県学力診断のためのテストから、本校正答率と県正答率を比較し分析する。また、県作成フォローアップ問題とアセスメント問題の正答率から児童の学力の変容を分析する。
- (2) 児童及び教員の意識・実態調査から、本取組に対する変容を分析する。

5 研究の内容

(1) 基本的な考え方

- ① 「論理的に思考する」とは、低学年では順序立てて考える力、中学年と高学年では筋道立てて考える力と考える。
- ② 「論理的に表現する」とは、低学年では自分の思いや考えをもつこと、中学年では自分の思いや考えをまとめること、高学年では自分の思いや考えを広げることと考える。
- ③ 「対話的な場」とは、子供同士の協働や教師との対話、また教材文との対話等を通じて、自己の考えを広げたり深めたりする場面と考える。
- ④ 「協働的な場」とは、対話を重視し、自分の考えを意見交換したり議論したりすることで、新たな考え方に気が付いたり、自分の考えをより妥当なものとしたりする場面と考える。
- ⑤ 「ICTの活用」とは、授業や児童の学習活動において、コンピュータやタブレット端末等のデジタル機器、インターネットや生成 AI、各種アプリケーション、クラウドサービス等を活用し、思考の可視化や共有、表現活動の充実を図ることと考える。

(2) 主題に迫るために

ア 児童の実態

令和6年度県学力診断のためのテストの結果から、第4学年から第6学年までの全ての学年において、国語の平均正答率は、県正答率を上回った。しかし、児童の解答からは、身に付けた知識及び技能を活用したり、読み取った情報を基に自分が考えたことや想像したことを表現したりする力に課題が見られた。このことから、知識及び技能の習得に加え、それらを活用し、児童が論理的に思考したり、表現したりする力を高める手立てが必要であると考えられる。

イ 児童が論理的に思考し表現する力を高める授業への改善

児童が身に付けた知識及び技能を活用し、児童が論理的に思考したり、表現したりする力を高めるために、ラーニングマウンテンの活用と複線型の学びを取り入れた授業への改善が必要であると考えられる。

まず、ラーニングマウンテンを活用することで、授業者も児童もその単元のゴールや目標を達成するために必要な言語活動を理解し、学習の見通しをもつことができる。また、見通しをもつことが、順序立てて考えたり、筋道立てて考えたりするなど、論理的に思考する力を育む手助けになると考えた。

そして、複線型の学びを取り入れることで、1人1台端末を活用した個別最適な学びの実現や対話や協働による深い学びの実現を目指す。児童が自分に合った学習方法を選択することで、自分の思いや考えをまとめやすくしたり、対話や協働を通して自分の思いや考えを広げやすくしたりするなどの論理的に表現する力を高めることにつながると考えた。

ウ ICTの効果的な活用

対話的・協働的な活動の場で、思考の可視化や共有、表現活動の質を向上させるためには、ICT

の活用が不可欠である。授業の中で ICT を活用することで、これまでのノートやワークシートなどを用いた対話的・協働的な学習と比較すると、自分や他者の考えや意見を書き直したり、入れ替えたりする協働的活動などが容易になり、十分な時間を確保して、活発な対話的・協働的な活動につながると考えた。

エ 学習環境の整備

漢字コーナーやモジュールタイムの活用により、基礎的な知識・技能の定着を図る。また、要約や条件作文などにも継続的に取り組み、読解力と表現力の向上につながると考えた。

(3) 研究の実践

ア 麻生東小学校授業スタイルの改善

資料 1 は、昨年度まで活用していた授業スタイルを基に、どの教科でも適応できるものへと改善した授業スタイルである。目標（ゴール）を意識した単元の導入から始まり、自力解決と対話を往還する複線型の学び合いを重視した。さらに、比較・検討による整理・分析を行い、児童の言葉からまとめに繋げることを意識した。この授業スタイルを基に全教員が授業を展開することで、授業の改善を図った。

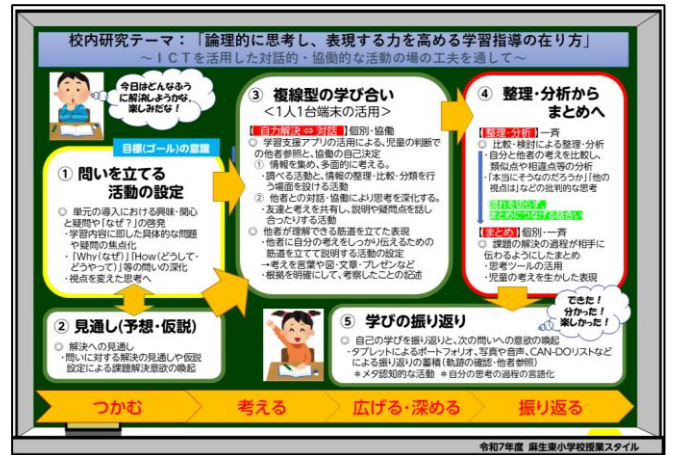
イ 単元計画表の作成

資料 2 は、学習指導要領を基に単元の指導のねらいを的確に設定し、児童の発達や学習の状況に応じた言語活動を位置付けることを目的としたラーニングマウンテンである。

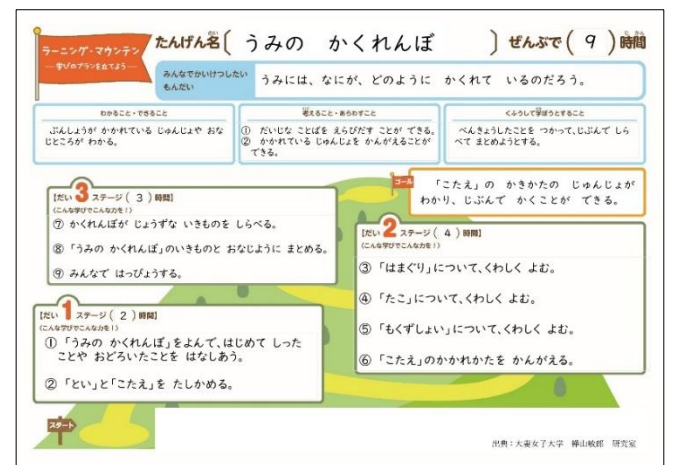
児童の思いや考えから単元を貫く問いを設定し、その問いを解決するための学習の道筋を示した。授業の導入において、ラーニングマウンテンを確認することで、本時の学びが、目標とするゴールとどのように繋がっているか、児童が意識できるようにした。

資料 3 は、研究授業を重ねる中で、改善したラーニングマウンテンである。学習内容だけでなく、本時の学び方や振り返りを記入できる欄を設けた。毎時間の振り返りを蓄積することで、学んだことや自身の変化、気づきを見童が確認できるようにした。

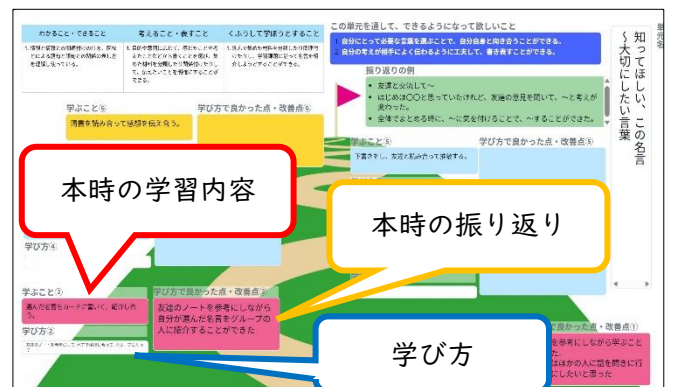
また、ラーニングマウンテンを作成することで、授業者が単元の終わりにどのような力を見童に付けたいのか、どこに対話場面を設けるか、ICT の効果的な活用場面はどこかなどを意識し、授業の改善を図った。



【資料 1】麻生東小学校授業スタイル



【資料 2】ラーニングマウンテン①



【資料 3】ラーニングマウンテン②

ウ ICT の活用

主体的・対話的で深い学びを実現するには、ICT の活用が不可欠であると考えた。そこで、ICT を効果的に活用できる場面として、以下の2点に着目した。

- ① 考えの共有や他者参照による対話的な活動の場
- ② 個別最適な学習形態の自己選択の場

資料4は、第5学年国語科「想像力のスイッチを入れよう」の授業における児童の様子である。児童の意見がリアルタイムで反映されるため、自分の考えとの相違点やそのように考えた理由について、対話を通して考えを深めようとする児童の姿が見られる。児童の意識調査の結果からも、「話し合う中で、自分の考えをよりよいものにしようとしているか。」という項目において、中高学年の肯定的回答の割合が増加した。



【資料4】児童の様子①

資料5は、第4学年国語科「ごんぎつね」の授業における児童の様子である。児童が自分の考えをまとめる場面において、タブレットを使うかノートにまとめるかを自己選択して学習している。



【資料5】児童の様子②

その他、教科書と同様の資料をクラウド上で共有することで、児童が自分に必要な資料を選択して、学習に取り組んでいる。

授業者は、これらの場面において、ICT を効果的に活用できるような授業づくりを意識して指導を行った。

エ 学習環境の整備

論理的に思考し表現する力を高めるためには、基礎的・基本的な知識・技能の定着が必要であると考えた。そこで、知識・技能の定着を図るための手立てを講じた。

資料6は、階段の踊り場に設置した漢字コーナーである。毎月、異なる部首をお題とし、児童が自由にその部首を使った漢字を書き込めるようにした。たくさんの漢字を日々目にする機会が増えたことで、今まで学習してきた漢字の復習にもつながった。



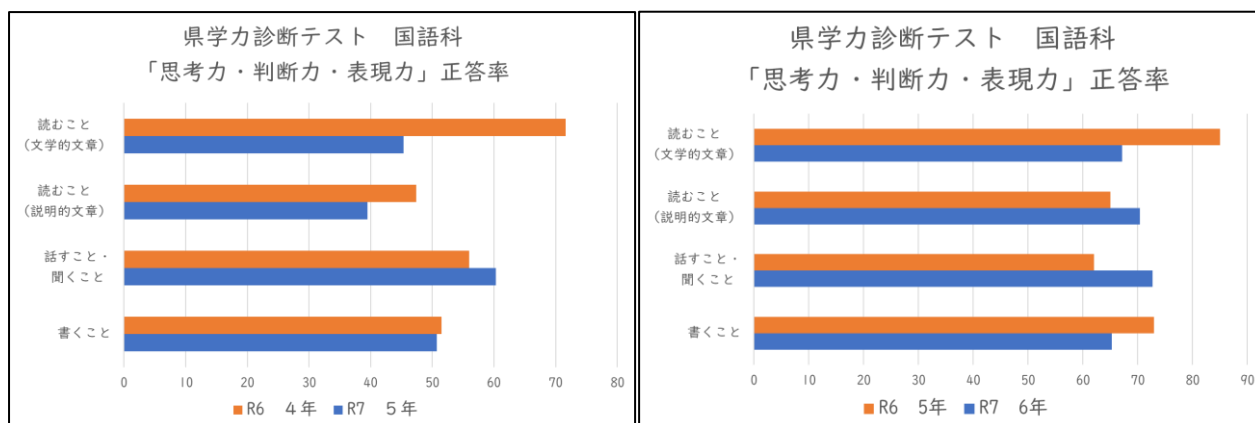
【資料6】漢字コーナー

資料7は、モジュールタイムの学習の様子である。本校では、週に3回15分間のモジュール学習を国語の学習の時間として設定している。各学年の実態に応じて、漢字の学習や語彙を増やす活動などを行い、知識・技能の定着を図った。また、文章を要約する問題や条件作文などにも取り組み、本校の課題である国語で表現された内容や事柄を正確に理解したり、国語を使って内容や事柄を適切に表現したりする力を高める学習も行った。

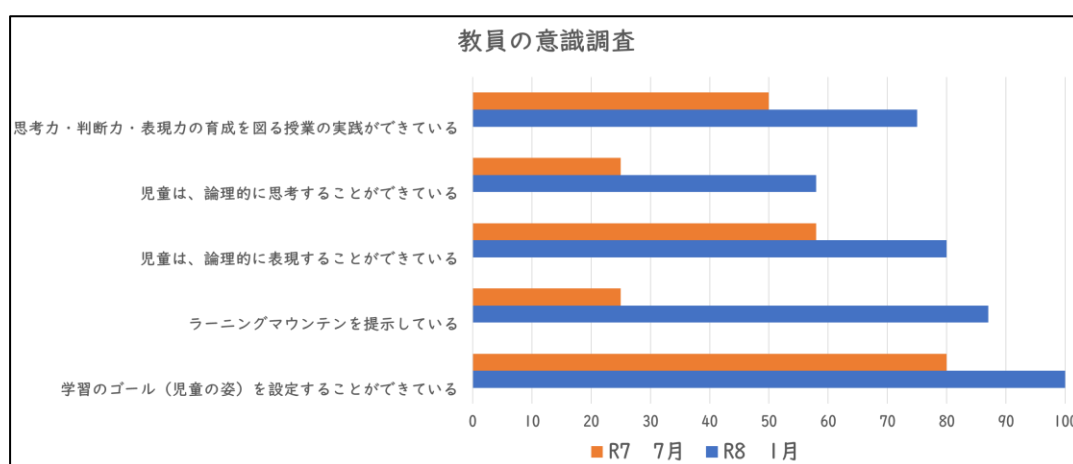


【資料7】モジュールタイムの様子

(4) 成果と課題



【資料8】R6、R7県学力診断のためのテストの結果



【資料9】国語に関する教員の意識調査

ア 成果

- 資料8は、令和6年度と令和7年度の県学力診断のためのテスト国語科の結果を比較したものである。昨年度と比較すると、「話すこと・聞くこと」の正答率が5学年+4.3%、6学年+10.7%であった。この結果から、対話的・協働的な活動を充実させたことにより、相手や目的を意識して、話したり聞いたりする力が伸びたと考えられる。
- 資料9は、教員を対象とした国語に関する意識調査の結果及び変容である。それぞれの問いに対して、肯定的回答数は増加しており、児童の思考力・判断力・表現力を高めるための授業改善が進んでいることが分かる。

イ 課題

- 資料8から、「読むこと」「書くこと」については、正答率の低下が見られた。これは、対話的・協働的な場においては工夫を行ってきたが、文章を正確に読み取ったり、適切に表現したりする力を高めるための手立てが不十分であったと考えられる。
- 資料9より、児童が論理的に思考していると感じている教員の割合が他の項目に比べて低いことが課題として挙げられる。

以上のことから、次年度は対話的・協働的な活動の場と「読むこと」「書くこと」をより密接に結び付け、根拠を明確にして記述する活動を単元の中に意図的に位置付ける必要があると考える。また、論理的な思考場面に対する指導の手立てが不十分であったことから、次年度は、児童が論理的に思考するための更なる手立てについて研究していく。